

意味あるサブシステム運動の構築のために ーフェミニズムのないサブシステムはありえないー

榊原裕美

横浜国立大学大学院博士課程後期
サブシステム研究会

はじめに

環境・平和研究会から 2002 年に出版された『「持続可能な開発」からサブシステムへ』に続いて、2004 年 6 月に『脱「開発」へのサブシステム論』¹が発行された。

著者のみなさんの精力的な研究に敬意を表したい。サブシステム論というまだ耳慣れない理論が普及する意味で大変喜ばしいことである。90 年代の最初から、マリア・ミースとの交流の中で彼女のサブシステム理論に共感し活動してきた私にとっては、この日本語にならず一見わかりにくい理論が人々の口の端に上り始めたことは嬉しいことだ。

私の所属するサブシステム研究会は、2001 年 12 月に生活クラブ生協神奈川 30 周年の招きで来日したマリア・ミースの、ピープルズ・プラン研究所のシンポジウムでの会場で発足した。ミースには「私には子どもがいませんが日本でサブシステム研究会という子どもを産んでいくことができると大変嬉しい」と祝福してもらった。²

彼女の初の日本語の本格的な翻訳本である『世界システムと女性』の翻訳者のひとり古田睦美氏と、当時ピープルズ・プラン研究所のコーディネーターとして、彼女の来日を企画した私榊原がとりあえずの発起人として研究会を始めることになった。以来、関心を持った人々と学習会や彼女の著作の翻訳、種プロジェクトなど、活動を少しずつ重ねているが、まだなかなか本格的な活動をしているとはいえない。そうした中で平和学会の中の平和・環境研究会から 2 冊の本が出された。が、私たちの研究会はまだ小さく、まとまった見解を出すほどの力もない。ここでの私の見解は私の全

く個人的な見解でしかないことをお断りしておきたいと思う。

第1作目については、季刊『ピープルズ・プラン』20号(2002 秋)で、書評を書かせてもらった。第2作目については、光栄にもコメントを依頼していただいた。この著作の中を読んで私の中で引き出されたものをこの小論の中で展開していきたいと思う。

実は第3章「ジェンダーと環境」の章でのフェミニズムへの理解にミースのサブシステム論に接してきた者としては、大変困惑した。それはたぶんフェミニズムについての前提が異なっているのだと思う。以下違和感の強かった箇所を引用しておこう。

2 男女平等では問題は解決しない

……………中略……………

このような「北」の女性たちのフェミニズムの主張、すなわち、平等の権利を求める自由主義的価値観の上に立つリベラル・フェミニズムのそれや、女性差別の根源を家父長制に求める立場と、先住民族女性たちの主張は次の点において大きく異なっている。

第一に、「北」の女性たちが追求する平等賃金と平等な地位は、「南」の人びとや先住民族の犠牲の上にはじめて成り立つものであり、その意味での男女平等の要求は、先住民族として、そして女性としての尊厳を求める先住民族女性にとっては解決法にならないというものである。

第二に、先住民族女性は、彼女らに対する差別克服の中心的な課題が、植民地と征服によって剥奪された先住民族の主権と自決権の回復にあるとする。彼女らにとって差別や抑圧をなくすとは、女性であると言うことのみを取り出して考えられるものではない。

第三に、先住民族女性は、固有の文化・世界観・精神性(スピリチュアリティ)の回復を通じて、彼女らに対する差別や抑圧を生じさせる社会を変革することができることを主張する。これは伝統文化が女性を抑圧してきたとして、そこからの女性の解放を訴えてきたフェミニズムの見解と対立する。

第四に、先住民族女性は(中略)男女間のバランスや均等と言う考え方を重視する。……人間を含む自然のすべての要素は互いに補完的な存在であり、女も男も相

互補完的な関係にあると考えられ、非対称ではあってもどちらかが優位に立つものとはされていない。³

また、イリッチの再評価ともいえる叙述がある。

イリッチの思想が、21世紀の現在においてサブシステムを考えるときに重要な意味を持つのは、それが近代産業化社会の諸制度が持つ暴力性を明らかにしたからであったし、開発の暴力にさらされた人びとがいかにそれから逃れることができるかと言う問題意識を出発点としたことにあることは忘れてはならない。⁴

「北」のフェミニズムがなぜ「すなわち」リベラル・フェミニズムとラジカル・フェミニズムなのか？そしてなぜ、植民地支配と女性問題が別の問題として、それぞれ対立するものとして前提されなければならないのか？サブシステム論は、サブシステム（人間の生存維持のための生産基盤）の担い手であった女性と植民地化された地域の人びとへの抑圧の問題の分析の末にこの構造のつながりとして出されてきたもののはずではないか？

また、イリッチについては「忘れてはならない」のは、彼の「問題意識の出発点」の「善意」ではなく、その彼がなぜ80年代世界中のフェミニストから非難されたか、の理解である。それをバイパスして彼に依拠しサブシステム論を立てることは、不可能だと私は思う。などなどが基本的疑問として沸いてくるのだが、しかし、この章の内容についていちいちに批判を試みることはあまり建設的でないので避け、80年代のフェミニズム思想の紹介をすることで、これからのサブシステムの理論と運動を提起したい。ミースの理論だけがサブシステムではないが、サブシステム論の積極的な提唱者であり運動家であり実践家でもあるミースのフェミニズムに基くサブシステム論への無理解や誤解のもとに、望ましいサブシステム論の発展はないのではないかと恐れる。つたない紹介にしかならないかもしれないが、この違和感から引き出されて、ミースのサブシステム・フェミニズムを改めて提起してみたい。

結論が先になるのだが、私が深く共感しているミースのフェミニストの

定義を最初に紹介しておきたい。

フェミニストの多くは家父長制のなかで男と平等になることさえ望んでいない。家父長制の中にいる女性にとっての「平等」とは、女が家父長的な男のようになることを意味するだけである。自分をフェミニストと呼ぶ女性たちはこのような未来に魅力を感じていないし、このシステムの中で「平等」の要求が実現するという期待もしていない。・・・しかしフェミニスト運動は基本的にはあるエリート権力者に別の権力者が代わることを望まず、エリートではない普通の人間が他人を搾取・支配することなく生きられる、非階層的で、分権化された社会を作り上げることを望むアナーキストの運動である。⁵

家父長制は目に見える資本主義システムの見えない地下組織を構成している。・・・換言すれば、フェミニズムは男と女の間接関係をはじめとして、人間と自然の関係、植民地主義国と被植民地の関係にいたるまで、資本主義的家父長制のあらゆる関係と闘わなければならないということだ。これらの関係は相互に関係しあっているため、そのうちの一つに焦点を当てるだけでは目標に達することはできない。⁶

まずは、そもそもフェミニズム運動とは何かを共有する前提としてふまえるために簡単に述べておこう。

フェミニズム運動の到達点

1968年のいわゆる学生革命の時代、戦後的な価値観が大きな批判にさらされた。世界同時的に北アメリカ、ヨーロッパ、日本などの工業国で起こった学生たちから既存の社会への突きつけ、異議申し立ては、当時の大学教育のあり方への批判として噴出した。そして「プラハの春」により、社会主義国への幻想が崩壊し、ベトナム戦争の実態がメディアを通じて明らかになり、戦後の高度成長による福祉国家型管理体制が批判された。いわゆる「先進国」の価値観が大きく揺らいだのだった。

ここで生じた後の時代への遺産はさまざまである。これに詳しく言及す

るのは私の任ではないが、その前と時代を画する認識が大きく言って二つあるのではないかと思う。

- ① 東西だけではなく、南北の支配従属関係が倫理的に指弾された。日本では自己否定と言う言葉で語られ、アジアとの関係がとりあげられたが、そののち世界的なベトナム反戦運動の中で、日本の加害責任を問い、戦争のアジアへの植民地支配と戦後の新植民地的経済的支配を批判する運動に発展した。
- ② 東西を問わず国家による支配が問われた。それは、解放区自治区を拡大するある種の実力闘争として、国家支配の否定の運動となって表現された。東西を問わず国家ぐるみで推進される高度成長、生産効率至上主義、大量消費による画一的な人間の造型に反対し、個々人の解放が叫ばれ、性の革命が唱えられた。

日本においては、殊にその反乱はほかの国以上に政治や社会に影響しなかったと思われ、多くの人にとって唐突に挿入される映像ニュースの中だけの出来事である。

とはいえ、その後の「新しい社会運動」と呼ばれる運動に匹敵する運動として、フェミニズムや、反差別運動、障害者運動、国際連帯運動、消費者運動、環境保護運動、NGO、NPO 運動の中に、脈々と引き継がれてきたとはいえるだろう。⁷

例えば、反公害運動は、日本の社会システム、経済構造や政治構造、そして近代のあり方を告発し、その陰画をあぶりだす役割を果たす意味で重要なものであり、80年代を経て、「地球環境問題」に脱色され現代に至るも、原点としての大きな意味を持っている。公害問題は①の視点が大きく出されたアジアへの公害輸出の問題などとしても焦点化した。また消費者運動として、80年代フィリピンバナナのフェアトレードは、フィリピンの独裁体制と多国籍企業と日本とのかかわりへの批判から生まれたが、その他ネスルのボトルキラー（粉ミルクの第三世界の普及による赤ん坊の死）キャンペーン、南アフリカコーヒー購買による連帯運動（アパルトヘイト反対）、割り箸の持ち歩き運動（熱帯材の乱伐に加担しない）など、後の 90

年代初めに盛んになるグリーンコンシューマー運動や倫理的な買い物運動へとつながるような消費者運動が発生する。

韓国の独裁体制と日本の政治・経済界との癒着の問題をはじめ、アジアとの歪んだ関係の告発、そしてまた、健常者社会の価値観を揺さぶった障害者解放運動など、いくつもの日本の「中産階級的加害性」を問う運動を生んでいったのだ。

その一つとして68年からの日本の全共闘運動の中での葛藤から、ウーマン・リブが声をあげ、日本社会の好奇の目にさらされながらも、確実にそれは根付いていくことになる。

日本のウーマン・リブは、田中美津という特異なキャラクターを得て、国連をはじめとする国際社会や産業社会、政治の場での女性政策のとりあげ方とはまた違った思想性、傾向、運動形態を持っている。「土着的」なウーマン・リブは、後期、制度化アプローチの運動に転換していくが、アメリカにおいて、ベティ・フリーダンにウーマン・リブを代表させることの危険と同様、公的な側面の強い後期の運動にウーマン・リブを象徴させるのは、誤った方向付けになろう。その後期の制度化要求のフェミニズムについても、男性との平等は、性差別をやめさせるための運動として組み立てられたが、現存する男性規範を肯定するものではなく、常に男性社会のあり方自身を問うものとして存在し続けた。象徴的なのは85年の男女雇用機会均等法成立に対しての全国的な反対運動の中で女性運動団体から提起されたのが「女並み平等」であったことであろう（もちろんほとんどの女性団体はこの男性社会に女性を取り込むものでしかない法律に反対であった）。男性型の産業社会への女性の平等参加に対する矛盾の認識と否定は、日本のフェミニズムにとってはほぼ自明だった。

そして80年代以降のフェミニズムにとって大きな意味を持ったのは、前期ウーマン・リブ「土着的」フェミニズムの持つ、思想性であった。そこには68年の運動を経て共有された、現代日本社会の成り立ちへの自己否定の論理と、これ以上否定できない女性性を抱えもつ、己の生と性の肯定への道程（さすらい）であった。内面化した男性規範から、はみ出す部分への嫌悪と取り乱しを丸のまま抱えもち、自己への肯定感をそのまま近代へ

の告発に変えて行くラジカル性が、さまざまな共振を生んでいったのだ。

このウーマン・リブの思想については、80年代フェミニズムに先立つものとして、現在では多くの資料が発行され、研究がなされている。

ここで地下水脈としてのフェミニズムの思想と表層的な理解とのずれを江原氏の85年の著作から引用しておこう。

現在流布しているリブ運動像の典型は、リブとはあらゆる領域で「過度の男女の平等化」要求した運動であったというものである。リブ運動は、「伝統的な女性の仕事」に飽き足らぬ女たちが、家族内で、職場で、性や文化といった余暇領域で、「男並みになる」ことを目指して男性に不満をぶっつけ攻撃したと考えられている。それは「男たち」をうらやみ「男たちの職業的・社会的成功」をねたむ女たちが、自分たちも同じような職業的・社会的成功を収めることをめざして「男女平等」を要求したものだと考えられているのである。だが、このようなリブ運動像は、のちにみるようにまったくの誤りである。たしかにアメリカのリブ運動の一部はこのような志向を強く持っていたし、アメリカでも日本でもリブ運動の目に見える形での効果は、女性の社会進出であり社会的成功であった。だが日本のリブ運動に限定すればこうした主張をリブ運動が行なったことはない。⁸

ここでは、日本のフェミニズムを述べたが、いわゆる男性に女性を近づける、というようなフェミニズムは、官製フェミニズムとして、国連や政界の財界の動きのように目立つかもしれないが、それは他のNGO活動などと同様、すでに体制内化されたもので、日本だけでなくヨーロッパにおいても、女たち自身が運動として作りあげたのは、近代が、男性規範を基にした性差別で成り立っているとする立場のフェミニズムである。60年代からの完全雇用や、経済成長モデルの中で、文化・制度的に解放へ向かうと思われていたフェミニズムは、オイルショックに続くそのモデルの崩壊の中で、幻想を捨てなければならなかったのだ。「社会の進歩」に女性問題をとってつけることでは解決しないことがわかったのである。男女の性別分業とは男女が別々の仕事をしていること自身ではなく、公領域を男性が占め、女性が私領域に押し込められたことを意味する。この2つは近代

になってから作り上げられた性別による分業である。公領域が市民社会（「対等な合理的経済的人」の交換に基づく社会）であり、私領域は、その影(実は蓄積基盤)である。私領域は、公領域からは、見えない、カウントされない領域である。しかし、私領域なしに、公領域は成り立たない。ここでは、生活や育児という人間にとって根源的な活動が行なわれているからである。ここでの性別分業の廃止とは、公領域への女性の参加ではない。私領域を存在の基盤として搾取しながら存在する公領域のあり方への異議申し立てのことなのだ。

「家父長制と世界的規模の蓄積」分析視点

南米やインドのそれぞれ優れた実証研究者であったミース、クラウディア・V・ヴェールホフ、V・ベンホルト＝トムゼンらドイツ語圏出身のフェミニストは、それぞれの国で進む先進国による植民地主義的な現実と、そして本国で関わっていた家事論争を含むフェミニズム問題の議論と運動にかかわる中でその構造について貴重な発見をしていった。

その中のミースの、日本で翻訳されている本は2冊だが、各原著の本のタイトル名『女性—最後の植民地』（邦題『世界システムと女性』⁹）『家父長制と世界的規模の蓄積』（邦題『国際分業と女性』¹⁰）が、その内容を語っていると思う。

ヴェールホフ、トムゼン、ミースの共著『世界システムと女性』については翻訳者である古田睦美氏が精力的に紹介をおこなっているので、ここではミースの80年代の単著『国際分業と女性』の中での展開を中心に紹介することで当時のフェミニズムの到達点を述べたいと思う。

ミースは、資本主義の基礎となる物質的根拠として、ローザ・ルクセンブルクの理論を援用して以下のように述べる。

彼女（ルクセンブルク—引用者注）はマルクスの蓄積モデルは、資本主義は閉じられたシステムであって、賃金労働者と資本家しかいないという仮説にもとづいていると結論づけた。

ルクセンブルクは歴史的にこのようなシステムは存在しなかったこと、資本主義は常に労働力と資源を拡大するために、とりわけ市場を拡大するために「非資本主義的な環境と層」を必要としたことを明らかにした¹¹。

非資本主義的な環境と層とは、はじめは「自然経済」を持つ農民と職人であり、後には植民地であった。…換言すれば、植民地がなければ、資本蓄積または拡大した資本の再生産が止まるということである。¹²

彼女たちは、ルクセンブルクの分析(彼女の結論ではなく)に女性の再生産労働を付け加え、拡大を続ける成長モデルを支えるために近代社会が、さまざまなカテゴリーの植民地、とくに女性、他民族、自然を必要としていたことを明らかにしていった。

この生命の生産、すなわち、主として女性やその他の非賃金労働者(植民地における奴隷、契約労働者、農民など)の不払い労働によって行なわれるサブシステム生産は、「資本主義的生産労働」を確立し、搾取を可能にするための永続的な基盤となっているというのが私の主張である。非賃金労働者(主として女性)のサブシステム生産がなければ、賃金労働者は「生産的」にはならないだろう。マルクスと違って、わたしは資本主義的生産過程は二つの搾取から成り立っていると考えている。つまり、非賃金労働者(女性、植民地、農民)の過剰搾取と、それに基づく賃金労働者の搾取である。…第三世界の生産者には、西側の労働者の賃金交渉の基礎をなす等価交換の原則は適用されないのである。¹³

……資本主義の中心部でも周縁部でも、すべての社会、すべての階層を資本主義的生産関係に包摂するために明らかに性差別的な政策が使われている。

この戦略は「進歩的」もしくはリベラルな家族法(たとえば、重婚の禁止など)や、家族計画、開発政策などの外観をとることが普通である。メキシコで開かれた世界女性会議(1975年)で初めて出現した「女性を開発に統合する」要求は、アグリビジネスや未組織部門における資本主義的生産過程のにとって最も安価で、従順で、操作しやすい労働力として女性を雇用するために、主として第三世界で使われている。¹⁴

こうした一方の性のみならず私領域として非資本主義的生産様式を適用する偏った性別分業が彼女たちの言う「主婦化」である。この際の性別分業は植民地支配と同じく搾取・被搾取の関係の成り立つ分業である。

これは資本主義が、資本家とプロレタリアートという資本主義的生産関係の間の搾取だけでなく、植民地という非資本主義的生産関係を必要としたというルクセンブルクの継続的蓄積論と同じ構造で、資本にとって重要な蓄積の源泉となっている。

ミースは本国で勃興するフェミニズム運動の主体として自らを捉え返しながら、社会学者としてインド社会をフィールドに、拡大する搾取や抑圧の諸現象を実証する研究をしつつ、こうした抑圧関係の中に両者の共通点を見出さないわけにはいけなくなった。こうしてミースは女性に対してと植民地に対してのむき出しの暴力の起源と現在の性差別のつながりを追求していった。それが、この本のタイトルである「家父長制と世界的規模の蓄積」である。

資本主義的家父長制——「主婦化」イデオロギーと植民地化と男性のプロレタリア化

家父長制は始まりがある、ということは終わりもあるということだ。ミースは、男性の優位を示す狩猟民の神話は、男性が女性たちを養っていたのではなく、むしろ男性は女性の採集や農耕によるサブシステム生産に依存していたという家父長制の起源としての虚構を暴く。狩猟という男性の分業は武力という力による支配への道を開いた。

そしてもともと女性たちが持っていた、自分の体を管理する方法を放棄させ、徹底して男性支配の下に置くのが、中世から近代への過渡である 12 世紀から 17 世紀までヨーロッパに吹き荒れた魔女狩りであった。

ここで男性は、女性を管理する専門家としての名誉を確立し、あらゆる男性の仕事が魔女裁判の中で夥しく流された女性の血でもって作りだされ、富が蓄積されていったのだった。産婆をはじめとした女の身体を自己管理してきた女たちを魔女として撲滅することにより自然への畏怖心を払

拭して、近代医学や自然科学が確立される基礎がつけられた。

教会、国家、新興資本家階級、近代科学者は協力して女性を暴力的に従属させたのである。19世紀ヴィクトリア朝時代の弱々しい女たちは恐怖の体系の産物であり、この体系によって彼らは自分たちに都合のよい「女の本性」をつくりだしたのである。

15

この時代は同時に、「資本の本源的蓄積」の時代でもあった。ヨーロッパの富は、商業資本家による「公正な」貿易によって蓄積されたものではなく、略奪や海賊行為、強制労働や奴隷労働によって蓄積された。

魔女狩りを経て、本国のヨーロッパの女たちの従属が強制される過程は、大航海時代の「新」大陸をはじめとする異文化へ世界への略奪過程とともに行なわれ、また、本国の女性への馴致による「文明化」と、植民地の「野蛮人」への「文明化」もまた同様に行われた、と彼女は見る。

カリブ海の女奴隷には、1760年から1800年ごろまで妊娠が禁じられた。妊娠させるよりも、新しい奴隷を輸入する方が安上がりだったからだ。

こうした植民地での略奪と富の蓄積過程の中で、本国ではもともとブルジョアジーのシステムであった家庭への囲い込みがプロレタリア階級にまで波及する。女性や子どもを酷使した初期資本主義のシステムでは、彼らの健康が阻害され、続く戦争への兵士の補給にマイナスになったからである。1868年に、無産階層の婚姻の禁止の法律が廃止になり、婚姻カップルのスタイルが労働者階級にも波及した。無産者階級の側もそれを積極的に推進しようとした。男性のプロレタリア化（正規雇用労働者化）は女性の主婦化を基盤としている。彼らにも”小さい植民地”が割り当てられ、「文明化」され、市民の地位を得られたのである。主婦には、以前ならとても手に入らなかった植民地からの贅沢品を消費するというブルジョアジーと同じ仕事があてられた。つまり、植民地で生産され暴力的な搾取のなかで廉価になった贅沢品は、馴致された本国の主婦たちの消費によって購入され経済活動は進み、ヨーロッパの男性たちに「家族」賃金を分配できる経済成長を支え、プロレタリア化を支えたのである。

こうした中で植民地域での放恣な略奪は方向を変えていく。

1887年から91年までビルマにおける英国植民者の記述の引用は興味深い。彼はビルマでは、女性たちが自立し、男女平等で、平和を愛する仏教徒であることを叙述した後、「文明化」のために提案する。男には殺すこと、そして女たちは、男たちのために自由を放棄させることを。成功している民族は女性的な民族ではなく、男性的な民族である。女があまり独立心が強いと美德が失われる。女的美徳こそ男に妻と家族のために働かなければならないという気を起こさせ、彼を男にするのだ、と。

主婦化は、外部の植民地によってなしえる。宗主国内部の主婦化は、近代化モデルとして植民地へ輸出される。女性への暴力のうえに成り立つ近代は自然を陵辱し、他国のサブシステムを搾取することで成り立つ。そしてその支配に「主婦化」のイデオロギーが活用される。家父長制とは女性への暴力のシステムだが、その延長線上に、植民地への暴力を基盤とする略奪的な資本主義がある。これをミースは資本主義的家父長制と呼び、資本主義的家父長制が今日の暴力的な世界システムの根幹をなすと提起した。

世界大戦を経て、植民地が独立し、いわゆる「帝国主義の時代」を過ぎた今日も植民地の資源と女性の家事労働の圧倒的な不等価交換こそ資本蓄積の源泉であるのと同様の構造の中にある。

高度成長の中で、プロレタリアの近代家族化＝主婦化はほとんどの国において進んだ。

男性のもらう賃金は一人分ではない（ゆえに主婦を養う家父長的な賃金を女性が平等にもらうことはありえない）。その家族賃金は植民地的な搾取と主婦化＝家事労働の無償化がその成立基盤である。

日本の長引く不況の中で、男性正規社員の家族賃金・終身雇用の慣行が崩壊し、女性以外へも拡大し驚くほどの速度で進むパート化の波を見る今日、一人の労働に対して二人以上の生活をまかなう賃金を出していたこと自身が不思議な気さえする。実際不思議なことであった。

輸出された「主婦化」に基づく新国際分業と、「先進国」への逆輸入

多くの「先進国」においては、70年代こうした錬金術は破綻した。「先進国」内の製造業の労働コストが高くなりすぎたので、更なる蓄積のための新たな方法が模索された。それが新国際分業である。それまでの原料補給地としての植民地が、労働集約型、すなわち労働コスト集約型の生産の補給地となった。その労働の担い手は女性たちである。植民地過程の中で、「文明化」として進められた主婦化によって、女性は労働者でなく主婦として定義され地位が低下した。これが労働コストを著しく削減する。つまり女性の収入は主たる稼ぎ手の夫の補助的収入であるので、主たる収入源とは定義されず、労働者とは定義されないのである。

インドの手編みレースの労働の調査によってミースは、いち早くこうした賃労働へのプロレタリア化を経ない女性労働の再編手法を見出した。

インドから手編みレースを西側に輸出した製造業者が、10万人もの貧しい農民女性に「仕事を与える」ことで、自分たちは彼女たちの怠惰な「余暇時間」を生産的に使っているだけだといった。¹⁶

東南アジア、アフリカ、ラテンアメリカの自由生産地域では労働力の70%が女性である。自由生産地域に加えて、輸出志向のアグリビジネス、インフォーマル・セクターや家庭で働く女性を入れれば膨大な第三世界の女性たちが先進国のための製品を生産していることになる。輸出向きの自営農やプランテーションでは働く女性たちも含めれば数億に上ろう。

「女性を開発に統合する」75年国際婦人年以降の路線は、女性が自分たちのサブシステム生産を手放して、自分たちに必要がない物を製造する市場志向の生産に組み込ませることをも意味していた。¹⁷

これが資本の蓄積の源泉である「主婦化」という60年代、70年代から形を変えて進んだ性別分業の現在である。

そして、この新しい蓄積の源泉は第三世界から「北」の国々に逆輸入されている。こうした低賃金で従順で使い勝手のよい第三世界の女性労働は、

「北」の国の女性の生産労働をフレックス化の名の下に不明瞭化して、フォーマルセクターの自由な労働者から、パート、契約労働、自宅労働、地域のボランティアへと更なる格下げをするモデルになっているのだ。北の女性たちは「第三世界の姉妹たち」に適用されているのと同じやり方で開発に統合されている。先の第三世界の女性の主婦化による低賃金化が、日本のパート主婦労働とそっくり同じ構造であるのも、実は驚くには当たらないのだ。

中産階級フェミニズム—近代の中での家父長制的「伝統」の激化と拡大

ところでミースはインドのフィールドワークのなかで近代化による女性への暴力が拡大していることを指摘する。

インドに滞在したミースが 1972 年以降新聞に登場する女性への暴力の記事を集め気づいたのは、78 年以降インドの都市の女性運動が高まるなかで、農村地域では近代化のプロセスで女性への暴力が増えていること、また、農村地域だけでなく都市においても一般的になっていることだ。中でもインドのダウリー殺人事件（花嫁焼き殺し）は印象的だ。ダウリーとは、結婚する際に、妻側が必要とされる持参金（それは冷蔵庫やスクーターなどの財の場合もある）のことだが、その額が少ないとして、夫や夫側の家族が、妻側家族に要求し、断られると、ガソリンをかけ妻を焼き殺すという事件である。そのほとんどの真相は究明されず「料理中の事故で女が焼死」や、「女が自殺」とされていた。

これは農村など「遅れた地域」だけの女性たちに起こることではない。大学教育を受け、職業を持った女性が、乳児の母であったり、妊娠している場合でも焼き殺され、80 年代急増するのだ。

ダウリーはインドの高いカーストであったバラモン階層によってつくられた習慣である。地位の高い夫ほど、妻側の財産に関わらず高額のダウリーを要求できる。不労階級であるバラモンは寄進に名誉を与えることをもって地位を保ってきた。インドには花嫁を出す方が金銭を受け取る花嫁代償の習慣を持つカーストもあるが、ダウリーを与える家族は花嫁代償を受

け取る家族より、社会的身分が高いと見られている。近代化のなかで、人々はより高いステータスの習慣を身に付けようと、ダウリーの習慣は、これまでこのような習慣を持たなかった階層にまで広がっていったのである。こうして女性への暴力が拡大していく。

ダウリーは大都市の最も「進んだ」男たちで最も法外な要求になっている。多くの場合彼らはダウリーを弁護士事務所や開業医、エンジニアリング事務所などのビジネスを始めるための初期投資に使っている。そして妻の実家に法外な要求をし、断られると、妻に火をつけて殺すのだ。

そして、この傾向は近代技術の導入とともに歪みを増幅させた。羊水チェックがインドに導入されると、女児の中絶が増えた。羊水検査と中絶の費用の方が、ダウリーより少なくてすむというのだ。インドでは1911年以降性別比がかなり偏っているが（女性のほうが極端に少ない）こうした傾向の中で78年から83年の間にインドでは78000人の女児とわかった胎児が中絶させられたという。

ダウリー殺人はインドの特殊事情のようにみえるが、実はその構造には共通するものがある。日本においてもドメスティック・バイオレンスやセクシュアル・ハラスメントが、80年代以降問題化し、性暴力はいわゆる「工業先進国」において女性運動の大きな課題になっている。

世界共通に起こった70年代のウーマン・リブについてミースは、「先進国でも途上国でも起こっている中産階層フェミニストの運動を歴史の絶対的な必然と考えている」という。

西側¹⁸のフェミニスト運動はしばしば左派、とくに第三世界の左派から、教育のある、中産階層女性の運動にすぎないとか、労働社会層女性のために基盤を作り出せないでいると批判される。途上国の中産階層女性は大都市のスラムや村に行ってみるべきだとか、貧しい女性が悲惨さと搾取の支配から逃げ出すのを助けるべきだと忠告される。…女性の抑圧について議論を始めたこれらの中産階層女性は自己中心的だとかエリート主義者であると批判されることが多かった。またこれらの女性たちは「特権」階層に属していることに激しい罪意識で反応することが多かった。

いわゆる中産階層フェミニズムといわれるものに対する批判の論拠となってい

るのは次のような仮説である。それはその日その日を生きるために闘わねばならない女性たちは「女性解放」や「人間の尊厳」のために闘うというような贅沢に専念することはできないというものである。解放を考える前に、貧しい女性にはまず「パン」が必要なのだと言われる。他方で、所属する階層の社会的地位のゆえに、近代教育や雇用にアクセスする女性たちは、特に彼女たちがリベラルな雰囲気のある家庭で育った場合には、すでに解放されているとみなされる。女性解放についてのこのような見方からは、新しい女性運動を結集させた家父長制的な男女関係の微妙な面、特に女性に対する暴力の問題が排除される。

しかしすでに見てきたように、女性に対する暴力の増加はインド、その他の国で重要な問題となっており、それが多くの国で本格的な女性運動を誘発したのである。

フェミニスト運動が、彼女たちの階層に存在しこれからも成長することを詫びる必要はないと思う。都市女性が世界中で見られる反女性の動きから身を守るフェミニスト運動は絶対に必要である。だが、中産階層の女性たちが自分たちを進歩の間違ったシンボルとする神話やイメージ、社会的価値を破り始めるのも必要である。¹⁹

「先進国」での中産階級フェミニズムを放棄するのではなく、そこを契機に彼女たちの内面化された「開発モデル」を問うべきなのだ。「開発モデル」は、女性も男性の占める公領域に進出して「男性並みに」対等というイデオロギーだけをさすのではない。

都市の中産階層女性、特に第三世界の貧しい女性の中で働きたいと思っている女性は、まず中産階層女性についてのイデオロギーと現実とを批判するところから始める必要がある。²⁰

進歩のモデルとしての主婦像を無意識のうちに貧しい女性たちに振りまくことがないように。そして次のような肝要な指摘がある。

中産階層の理想の女性像についてラディカルなフェミニスト批判がなければ、中産階層の女性は、女性解放やあらゆる被抑圧者の解放にかかわっていたとしても、女性に関して「遅れている」とされる階層や社会で見いだされる本当の意味での進

歩的で人間的な要素が目に入らない危険がある。それは家父長制に完全に包含されない伝統が持つ要素であったり、母系的伝統の名残であったり、女性の力をしまっているポケットであるかもしれない。これらの要素は共同体や集団の生き方、働き方に、あるいは男や階級の抑圧に抵抗してきた長い伝統と起源をもっている。²¹

フェミニスト運動が存在せず、中産階層女性を幸せな未来の運搬人と見ることにフェミニストの視点で批判することがなければ、貧しい人々の中で働く女性の活動家たちは、このイメージがまったく役に立たない女性たちに無意識のうちにこのイメージを伝えることになるだろう。²²

ミース自身、ドイツのフェミニズム運動、インドの都市の中産階級のフェミニズム運動、農村地域の女性たちの生活や活動などと主体的にかかわる中で学んだことであろう。

ミースは、こうした発言をするとき、例えば以下のような女性たちを具体的に想定しているのではないか。

以下は後述するイリッチ批判でも引用しているが、スリランカの大学教員でアジア女性研究・行動ネットワーク（AWRAN）の創立者でもあるヘマ・グラナーティケ氏の発言。

スリランカの女性人口の80%から85%を占める真の女性、本当の女性のことを考えて見ますと、・・・抑圧に対して闘い、土地を持たないことに対して闘い、生存ということになると男と闘う。・・・スリランカの女性こそは、まさに貧困の矢面に立たされているからです。・・・スリランカの女性は貧困と闘い・・・食べ物を作ろうとしたのですが、水がないということで・・・男に灌漑タンクをなんとか使えるような姿に戻そうと・・・助けを求めたのですが、男は灌漑タンクの修理をすることなどは拒否していました。男はアヘンを作っていたからです。・・・賃金を得るためにアヘンを作るという仕事をしていただけです。結局女性は自分の力で灌漑タンクを修理し・・・スリランカでは「女性のタンク」と呼ばれております。・・・抑圧に対して闘い、貧困と闘い、男に対して闘い、闘い方はヨーロッパ諸国とは違うかもしれま

せんが、彼らなりのやり方で男と闘っている女性、そういった女性のグループというのはスリランカにたくさんあります」²³

ミースと『エコフェミニズム』（翻訳未完）を共著しているインドの反グローバル化運動の旗手で、エコロジストであるヴァンダナ・シヴァがフェミニストになったのもミースの影響が大きい。シヴァはどこに行くにも、もちろん日本に来るときも、サリーを着て現れるが、彼女たちはどんなにヒンズー原理主義が勃興したとしても自分たちの文化としてのサリーを捨てることはしないだろう。90年代終わりに、生物の多様性を提起する国際的な環境保護運動の中で、自分たちの使ってきた植物や動物の特許を取っていく多国籍企業に反対して作った「多様性のための多様な女たち」は、こうした住む地域の、エコロジーと文化の多様性を守ろうと女性たちが立ち上げた運動である²⁴。

中産階層女性はもっと貧しい姉妹のところに行き、彼女たちからこうした状況の下で生き残る方法を教えてもらう方が良いだろう、尊厳を持って生き残る方法も。²⁵

「南」と同様「北」の女性たちも、巧妙な家父長制の再配分の中で豊かさを享受し、あるいは生存を維持しながらも目のくらむような格差を生きているのだ。²⁶

女性解放と民族解放闘争のその後

ミースは、当然ながら第三世界諸国の解放運動に関心を寄せているが、民族解放闘争においても同様の女性への搾取が起こると述べている。多くの民族解放にこれまで女性たちが参加したし今もしている。そこではフェミニズムはどう扱われてきただろうか。

例えばヴェトナムにおいては、共産党は平等についてのフェミニストの考えを「ブルジョア・イデオロギー」として否定し、女性の解放をめざす闘いを民族解放の闘いの下位においた。

党は、女性たちをブルジョアジーのイデオロギーから解放し、ブルジョアジーの理論が主張する「性の平等」の幻想を取り除かなければならない。同時に女性を労働者と農民の革命闘争に参加させなければならない。これは絶対不可欠な仕事である。・・・27

ヴェトナムにおいては、解放戦争中の英雄的な行為にもかかわらず、戦後の政治組織への女性の参加は彼女たちの経済的貢献を少しも反映しなかった。

ベトナムにおける女性と革命についての本を著したエイゼンは、確かに現在平等を手にしていない、しかしそうした「封建思想」を克服するには「数世代」かかるといい、少なくとも、西欧のフェミニストはこうして傾向を批判すべきではなく「女性の闘いの文化的な面をきちんと見ることが不可欠」なのだというのが、同じく女性と社会主義的発展のベトナムのケースを現したホワイトは、ヴェトナムの農村女性たちは、昔から社会生産で重要な役割を演じてきた、と指摘する。

社会主義国においても解放後は、二重経済、すなわち、フォーマルな近代化された部門を、インフォーマルな、社会化された部門が補完する経済になる。こうして農業の下請けなどのインフォーマル部門はほとんどを女性が占めるようになるのだ。解放後の経済において開発モデルが、工業化された社会の成長モデルであれば、資本主義国と同様に、核家族の主要たる稼ぎ手の主婦として位置づけられる女性たちは、私領域に押し戻されていくのである。この開発モデルからいかに自由になるか、が問われている。

先進資本主義国のみならず第三世界の国々が、自決権を勝ち取っても結局開発モデルを採用していけば女性にとっては同じ私領域へ囲い込んだ上での搾取的な分業を行うほか、蓄積がもたらされず、「開発」は成功しない。私たちはイニシアティブがどこにあったとしても、女性の分業による搾取とは違う社会のあり方を考えなければならない。それがフェミニストに課せられた問題であり、サブシステムの方向であるとミースは言う。

女性の地位低下による近代化への包摂を発生させないために、女性たち

の歴史的に果たしてきた社会的生産を強調し、開発モデルと異なる自立(サブシステム)経済の道を探るのは重要なことだ。「近代化」されない相互補完的な両性のあり方を、これまで述べたフェミニズムの家父長制の分析からフェミニズムは否定していないのだ。

遅すぎた出遭い？

さて、『国際分業と女性』は、97年になってようやく翻訳された。翻訳者の奥田暁子氏には感謝してしすぎないことはないが、遅きに失したという思いが否めない。彼女は訳者あとがきで以下のように言う。

もっと早くに邦訳されるべき著作であったが、日本に紹介される時期としては、刊行直後の80年代よりも、むしろ今日の方が時宜にかなっているかもしれない。なぜなら、本書で展開される著者の鋭い分析はまるでバブル後の今日の日本経済の状況を見越していたかのように、私達を納得させる力を持っているからだ。これが80年代であれば、マス・メディアが「女の時代」ともてはやし、女性たちも浮き足立っていた時期であったから、著者のメッセージは私たちの耳を素通りしていたかもしれない。

28

同感だ。しかし同時に私は彼女の著作が日本ですぐ刊行され（韓国ではすぐされたらしい）ていれば、「浮き足立」つことなく、マスメディアの喧伝する「女の時代」も、主婦という言葉のニュアンスも違ったものになっていたに違いないと思えてならない。

残念ながらミースが日本に紹介されたのは90年代に入ってからであった。彼女の来日は1992年の国際交流基金の招きが最初であった。

そのとき提起された「不払い労働」はともかくも、「主婦化」という言葉の響きに違和感があったのを思い出す。日本の文脈の中で、特に生活クラブという主婦たちの運動の職場にあった私には、自分の定義としての主婦、はあっても、一般的に主婦という言葉にはネガティブな意味が含まれていなかったからである。つまり主婦とは、一般的に自由人で、組織に縛られ

ず、「強制的な賃労働からも自由」で、自己裁量できる家庭の仕事を自由にやりくりし、自発的で、ラジカルで、ネットワークをつくり活動する女性たちのことだった。だから「主婦化」という言葉の日本での含意の落差に少なからず混乱した。パートの運動にかかわっていたにもかかわらず、ミースたちが、主婦を、低賃金で雇用主に都合よく、組織化されない、ばらばらな「不自由な労働者」、として見ていたことにすぐにはぴんと来なかったのだ。

先進国の中産階級の主婦の消費者運動を、植民地化を乗り越えるオルタナティブとして高く評価するミースはヴァンダナ・シヴァとの共著「エコ・フェミニズム」(翻訳未完)にも、生活クラブの活動に1項目さいており、来日の際も生活クラブの活動家と話を希望した。ミースの強力な紹介者だった上野千鶴子氏に彼女が共感をしたのも、「女縁が社会を変える」という本の英訳を読んでいたためと思われる。現代の社会構造の中で最も惨めで、虚栄的で、従属的で孤立化している抑圧されしネガティブな存在が主婦であるゆえにその人々にこそ変革の主体を見るというのが彼女のマルクス主義フェミニストとしての志向だったのだろう。それは生活クラブへの過剰な期待としても表現されていたと思う²⁹。

94年に、生活クラブに取材に来て、生活クラブ生協神奈川の元理事長の横田克己氏にインタビューした。大変印象的だったのは、生活クラブが食糧の輸入に反対し国産志向であることに触れた時のことである。ミースはエコロジストなので食糧自給や食料主権の運動にも深く関わっていたが、アメリカが日本から車を買う代わりにアメリカからの食料輸入を増やせ、と喋ってくることに對して、それならアメリカに車を売らなくてもいいじゃないかと生活クラブの女性たちは言っているそうですね、と横田氏に質問した。彼は困惑し、「組合員の夫はそれで仕事をしているからそういう主張は無理です」とあまりに正直に現実を言っていた。

最底辺の主婦のラジカル性に期待する彼女の志向性と、実際の生活クラブ、そして日本の主婦の運動の構造をあまりにも端的にあらわしたやり取りだったと今思う。

70年代を企業の合理化と、パート化で乗り切った日本で、企業の締め付

けが厳しく言論の自由も、ゆとりもない労働現場での労働運動は窒息し息を潜めた 80 年代に注目されていたのは、地域と女性運動であった。男性が企業に飼われて働き蜂であることの裏返しに、主婦たちの活躍、があった。そこには実は巧妙に、85 年の均等法制定以降、正規労働からの女性たちの締め出しが進んでいたのだが、均等法で男性化した職場で疲れ果てる若い女性たちと裏腹に、主婦は、環境運動や反原発運動、地方政治への参加などをはじめ活躍し、世界を変え、社会を変え、やりたいように生きる自由人の代名詞になっていた。その基盤は日本的な労働奴隷の男性職場であり、進む労働強化のなかでのあだ花である、ということに気づかぬまま、踊り続け、そのつけは、90 年代以降に払うことになる・・・。

主婦の黄金時代だった 80 年代に、ミースの「主婦化」の分析視点が充分広がらなかったことを残念に思う。80 年代の日本ではミースではなくイリッチが紹介されたのであった。このことは日本のフェミニズムと資本主義的家父長制にとって大きな意味があったと私は思えてならない。なぜなら 80 年代こそ新国際分業に基づく性別分業が露骨に進行していくことをしつかりと見るべき時代であり、補完的なジェンダーが語られることによって現実の第三世界の姉妹たちの新国際分業の中での闘いの中ではなく「過去の美化」にすりかえられるというようなことが起こってはいけなかった、と思えるのである。新国際分業の構造こそが指摘され、それを乗り越える方策が志向されるべきだったと私には思われてならないのだ。

イリッチのジェンダー論

70 年代後半から、脱学校化社会、脱病院化社会、などを唱え産業社会批判の鋭い論者として注目を浴びていたイリッチ氏が 80 年代初めにヴァナキユラー・ジェンダー論やシャドウ・ワーク論を発表し、日本でも翻訳され紹介された。³⁰

ここで彼のジェンダー論について、見てみよう。

イリッチは、産業化される前の社会と後の社会近代を、労働をはじめとした社会規範にジェンダー（性差を基にした分業）がはっきりしていた時

代、つまり女の服装と男の服装が完全に別になっていたように、生活全般が男女ではっきりと別れており、どちらにもそれぞれの価値が存在し、相互が必要で補完的であったという。ところが、一見性別のない中性を装う（女性も参画できるように見える）賃労働が社会の中心になると、社会全体が片方の性である男性の規範になった。この転換により、女性は、女性としての確立していた性に基づく仕事や活動（ジェンダー）が否定され、さりとて男性でもないものとして、男性の影になり、未曾有の地位低下が起こった。こうして産業社会は女性を巧妙にかつ完全に排除するシステムとして出来上がったとする。

産業社会とはその犠牲者なしに済まされない社会である。19世紀の女性は、困い込まれ、職務から解任されて、傷つけられた。やむなく彼女たちは、社会全般に及ぶ腐敗的な影響を身につけた。³¹

かつてあった「ジェンダーは、足取りや身振りのすべてにあらわれているのであって、股間だけにあるのではな」³²だった。

しかし、ジーンズをはいている男女の違いは見ただけでは区別が分からない。つまり彼の「ブルー・ジーンズのふくらみといった、特徴的ではあるがまったくどうでもよいことでもって、いまや人類のひとつの種類を他の種類と区別し」ている産業社会をセクシズムと呼ぶのだ。「女性にたいする経済的差別は、ジェンダーを棄却してセックスを社会的に構成するということなしにはありえないものだ」³³という。

産業社会が存立するためには、単一^{ユニセックス}の性の前提が押し付けられなければならない。男性も女性もともに同じ労働=仕事ができるようにつくられており、同じ実在知覚をもち、些細な外見上の違いはあってもニーズは同じである。……<労働=仕事>が^{セックス}性に関係なく人間にふさわしい活動だと定義されていなかったら、男と女のあいだに<労働=仕事>のための競争などありえないだろう。経済理論が依拠している主体とは、まさしくそのようなジェンダー不在の人間なのだ。³⁴

中性とされながらそこには男性性が隠されており、そこから女性は巧妙に排除される。(日本語ではまさにチン労働なのでそのままともいえる—この言い方は日本でフェミニストへの揶揄に使われた下劣な言い方だがわかりやすい)。近代の産業社会の中心的な労働である賃労働自身が性差別を含んでいると読み取れる指摘だが、中世から始まった結婚が、あらたな経済単位での生活—課税されうる一つの実在物への統合として、ジェンダーを棄却してセックスを社会的に構成したのだという。

〈シャドウ・ワーク〉と賃労働はともに連れ立って歴史の舞台に登場した。・・・〈シャドウ・ワーク〉への緊縛は、何よりも性で結ばれた経済的なつがいをとおして、はじめて達成された。賃金を稼ぐものとそれに依存するものより構成される19世紀の市民的家庭が、生活の自立・自存を中心とする生産=消費の場としての家にとってかわった。そうした市民的家庭は、専業主婦と労働する男とを、双方が補完しあうことでともに不能になってしまうような、「ホモ・エコノミクス」に典型ともいえる束縛の中で結びつけた。³⁵

そしてまた捏造されたシャドウ・ワーク—インフォーマル・セクターの労働が女性のカテゴリーを越えて増加することを当時から指摘し、批判した。

・・・私は〈シャドウ・ワーク〉を、現代の家事をひな型とする社会的現実を指し示す用語として提案したい。増大する失業者数を、ただ忙しくさせられてるだけの職にある人々の増加数に加えてみるとよい。そうすると〈シャドウ・ワーク〉はわが晩期産業時代においては賃労働よりもはるかに一般化しているということが明らかになる。今世紀の終わりには、生産的労働者のほうが例外的な存在になるであろう。³⁶

イリッチの主張とミースたちの主張にはかなり共通点が見られる。それは当然でもある。

シャドウ・ワークという言葉は、クラウディア・フォン・ヴェールホフとの会話の中で作りだしたことを著作の中でも述べている³⁷ように、彼の

ジェンダー論は、欧米で起こったフェミニストの家事論争に多くを負っている。実際のところ近代産業社会は、確かにどの時代よりも際立って性差別が拡大されたということでは、近代化を女性の差別の解放と見る単純な進歩主義を批判するフェミニストと同じ地平に立っているとは言える。ここでの両者の大きな違いは、家父長制概念についての理解ではないかと思う。

イリッチは、近代産業社会のユニセックスのセクシズムとして過去の家父長制とは明確に区別した。

私は家父長制というとき、ジェンダーの仮定のもとの力のアンバランスを指すことにしている。セクシズムと言うのは、明らかに家父長的な力関係が現代社会の中に継続していることではないのだ。むしろセクシズムは、これまでのところ社会・生物学的根拠にもとづいて人類の二分の一が考えもつかないような個人的劣化に陥ることである。³⁸

近代産業社会は、彼によれば性による相互補完性とともに入父長制とも切断された、のである。しかし、実際はインドのダウリー殺人のケースのように、家父長制は近代によって強化・拡大されているのでは、と見る点がフェミニストの資本主義的入父長制の分析と異なるのだと思う。

実はイリッチは第三世界の女性たちのジェンダーのことは何も語っていない。彼が強調するバナキュラー・ジェンダーは西洋の前近代のことで、現代の非西洋の非近代的社会のことを言ってるわけではないことである。

イリッチは、歴史家として語るのは過去のことのみなのである。

・・・私が社会科学の理論よりもむしろ過去を探求するのは、ユートピア的な考え方や計画志向を避けるためである。過去は、計画や理想とちがって、現に可能性のあるようなものではない。あるべきなにかではない。過去とはあったものなのだ。

フェミニストはなぜイリッチを批判したか

こうした彼のジェンダー論は、フェミニストたちからいっせいに反発されることとなった。なにが、それほどまでに彼女たちを怒らせたのか。

1982年9月に、イリッチがカリフォルニア大学バークレー分校の名誉ある連続講演に招かれ、8週間にわたってジェンダー論を講義したとき、バークレーのフェミニストたちの期待はまもなく失望に変わり、「やがて怒りにとってかわった」(Bowles 1983)。彼女たちは最初、自分たちの違和感をこの世界的「権威」に対して表現することに臆病でしかもうまく怒りを分節することができなかった。

しかし8週間の連続講座の終わりに彼女たちはイリッチを招いてその批判集会を開催し、イリッチに謝罪させるところまで追い込んでいる。⁴⁰

フェミニストたちを怒らせたカリフォルニア大学での講義をもとにしたジェンダーは賛否両論を呼び起こしながら、フランス語、ドイツ語に翻訳され、日本語でも『ジェンダー』として翻訳された。

先にあげた江原由美子氏をはじめ、上野千鶴子、萩原弘子など各氏がそれぞれ1冊を著してイリッチを批判した。⁴¹

この現象は近代化を女性の差別の解放と見る単純な進歩主義フェミニストたちが、自分たちの信仰に対する彼の果敢な挑戦に腹を立てたからだ、といえるだろうか。

ミースはイリッチについて以下のように指摘している。

彼は最初はバーバラ・ドゥーデン、ギゼラ・ボック、クラウディア・フォン・ヴェールホフのようなフェミニストから多くの着想や考えを得た。彼女たちの資本主義下の家事労働についての分析がイリッチにヒントを与え、『シャドウ・ワーク』の論文を書かせたのである。しかし彼は家事労働をシャドウ・ワークというセックス・ニュートラルな概念の下に置くことによって、またもや女性の搾取を不明瞭にしただけでなく、最終的には唯物主義フェミニストの分析に観念的な解釈を与えた。このプロセスにおいて英語の「ジェンダー」という概念は分析全体を文化の領域に移

すのに役立つことになった。次の段階は、すべての普遍的な、文化的に決められた性差を廃止しようとしている（と彼の目から見える）フェミニストへの徹底的な攻撃であった。⁴²

彼はフェミニストから得たヒントを、彼女たちの真剣な議論に還元することなく、彼の歴史の文脈に写し取った。そしてフェミニストの運動への嘲笑に使った。例えば以下のように—

フェミニストたちの主張では、女性は、家の収入で買ったものを消費できるようにしているのだから、これにたいして支払われるのは当然だというのだが、もしもそうであるなら、賃金要求としては誤っている。フェミニストたちがせいぜい望むことのできるのは、影の価格ではなくて、等外の人がもらう残念賞というところだ。

43

彼女たちは家事が重労働であることを知っている。彼女たちはそれが支払われないことに腹を立てている。たいていの経済学者とは異なり、彼女たちはその賃金を取るに足りないどころか、失われた資金が巨額に上るものと考えている。さらに彼女たちのうち幾人かは、女性の仕事が「非生産的」であり、しかも「本源的蓄積の秘密」の主要な源泉をなしており、これこそ全知マルクスを当惑させていた一つの矛盾であると信じ込んでいる。彼女たちは、専業主婦を賃金稼得の家長に結び付けている。その際、男根（ペニス—引用者）よりもむしろ彼の給与（ペイ）の方が羨望の対象になっている。彼女たちは、それゆえ二重に盲目である。一つは、成長を目指して階級敵が仕組んだ19世紀の陰謀にたいして。そしてもうひとつは、両性間の経済的平等を測るために彼女たちが各家庭内に持ち込む20世紀の争いによってその19世紀の陰謀が強化されるのだということにたいして。⁴⁴

引用した萩原弘子氏は、後者を「ペニスとペイ（給与）の語呂合わせで茶化す悪意は唾棄すべきものだ」⁴⁵と怒りをあらわにする。こうした批判の内容の問題はさることながら、こうしたからかいの文体自身はあまり品がいいとはいえない。フェミニストへの悪意が感じられる（江原氏は先の批

判の本に「からかいの政治学」という一項を入れて、こうしたからいへの抗議の困難さに言及している) 46。

江原氏は、イリッチ批判を契機としつつ、女性解放の思想の 85 年当時の到達点を明晰な筆致で描き出した。

近代社会の実相は、近代の周縁であるところの家族、共同体、非・人間社会から収奪する限りにおいて成立しうるものに過ぎない。近代社会とは、その外部に非近代社会を不可欠の部分として必要とするアマルガムな存在である。 47

そしてリブを「女性の近代社会の外部としての存在を幻想として否定した。同時に内部システムの一部として生きることも否定した」 48とした。

この異化作用によって、女性たちは既存のあり方に衝突し、異議を唱える存在となったのだ。既存の家族制度を拒否してコミュニティを作り、メディアの性差別に異議を唱え、アジア侵略や女性への性的支配の中での経済構造としての買春観光に反対する運動を起こし、あるいは職場においては、育児の保障など女性が働きやすい条件を要求し、家庭において男性に家事を迫り、さまざまな形態をとって、男性たちに異議申し立てを行なっていた。

日本だけでなくヨーロッパにおいてもミースが紹介しているとおりにこうした闘いは広がったが、イリッチの目からは彼女たちの行動は見当違いでこっけいなものに写ったのだろう。

「彼女たちはそれゆえ二重に盲目である。一つは、成長を目指して階級敵が仕組んだ 19 世紀の陰謀にたいして。そしてもうひとつは、両性間の経済的平等を測るために彼女たちが各家庭内に持ち込む 20 世紀の争いによってその 19 世紀の陰謀が強化されるのだということにたいして」と揶揄したのだ。

彼は、ジェンダーの中で女性抑圧をあいまいにして、ミースが分析するような、抑圧的な分業の経済的な根拠—性別分業が、家父長制のなかで男性にとって利益を上げてきたことを何も説明せず、産業社会批判を文化の

領域に摩り替えていった。

男女が別になっていれば同じ土俵で言い争うことがない、別の身分であれば競争がない、という身分的調和の世界では、当然争いもなくフェミニズムもなかったに違いない。平等の思想がなかったからであるし、過酷な支配も不条理な扱いも自然な法則と受け入れるほかなかったからである。それはたしかに平和であったに違いない。

しかし過去の女性たちはこうした調和的な世界で安寧に暮らしていたのだろうか。

以下は先にあげたが、スリランカの大学教員でアジア女性研究・行動ネットワーク（AWRAN）の創立者でもあるヘマ・グラナーティケ氏のイリッチ、上野千鶴子、西川潤などを含むディスカッションの中での発言である。

イリーチ（原文ママ）さんが先ほどフェミニズムの定義をされましたけども、それには『反対だ』と申し上げたいと思います。・・・私なりの定義を提起しておきたいと思います。

それは何世紀も前から私どもの地域で使われてきた定義です。紀元前 6 世紀にフェミニストによる闘いがありました。500 人の仏教徒の女性が宗教における全面的な平等の権利を求めて闘ったのです。つまり男性と同じように僧侶になる権利を求めたわけであります。

・・・今日、あれ以来何世紀もたったわけでありますけれども、女性は今直紀元前 6 世紀に女性が求めたのと同じような権利を求めて闘いをしているわけでありませう。例えばスリランカでは、・・・尼僧は男性の半分くらいの権利しか持っていないのです。⁴⁹

ミースがダウリー殺人のケースで分析したように、家父長制と近代産業社会の性差別は切断されているのではなく、インドだけでなく日本においてもむしろ再編強化された。イエ制度などは明治期に「伝統」を装って登場したが、もともとは支配階級の中だけの「伝統」を、明治になってから新たに拡大解釈した新しいものだ。開国による近代化に対応するために、

日本という架空の共同体概念と、それを支える具体的生活に密着した「伝統」を捏造する必要があったのだ。特に日本においては近代はあきらかにその伝統を装った家父長制を同伴して発展を遂げたと言えるのではないか。例えば、青木やよひ氏は次のようにそれを指摘する。

日本の場合ですと、・・・少なくとも明治以後普遍化された、ある種の、非常に意図的なコンテクスト、たとえば、それまでの農民文化とはまったく異質の、禁欲的で男尊女卑的なモラルで規定された労働間とか人間関係とかがあります。初めは異質でも何10年も経てば伝統とみなされる。そういうものが、現代も企業社会に有利な方向で読み替えられて巧妙に利用されているんじゃないか。そうでなければ、日本の社会における、企業に対する社員やその家族の異常な忠誠心などは説明がつかないのです。⁵⁰

またヴェールホフの批判にもあるように、イリッチは男女の違いを語りながら生殖に伴う労働については何も語っていない。生殖機能に伴う労働がどのように近代社会に位置づけられるかこそが男女を分ける大きなものであり、再生産労働をいかに見るかはフェミニズムにとっての大きな課題であったにもかかわらず、彼の関心の外であったのだろう。⁵¹

女性差別は、実は生殖機能と切っても切り離せないのだ。家父長制とは、次世代の継続の輪から生物学的にはずされた片方の性の「ねたみと造反の価値体系」によって優劣を逆転させた自然への反逆である。そうでなければ「産める」という生物的にポジティブな特徴を持つ性が劣性とみなされ、「産めない」というネガティブな特徴を持っている片方の性が上位階層になるという不自然な価値観になりようがないと思う。⁵²

彼のジェンダーという「文化様式」への関心に基づく過去にとっては、産む機能を男性によって管理され、支配され、妊娠・子育てといった「再生産労働」を引き受けるが故に作られた歴史的なハンディについての女性たちの苦難の事実はなかったことになるのだろうか。

上野氏は、「女は世界を救えるか」の本において、イリッチの銜学に対抗して文化人類学の銜学を駆使して、前近代を性による階層のない無垢で両

性が対等な社会とすることはできない、それは近代の贖罪意識の反映としてのバイアスでもあるとし、ずっと女は交換物として扱われてきて、母系制の社会はこれまでなかった、女性にとって美しい過去などなかった、と論破する。⁵³

前近代では男女よりも身分の違いの方が大きく、階層によって家父長制の様相も異なる。高い階層の方が家父長制が強く、貧しい階層に弱いのは、差別できるほどの原資がない、差別したら女が死んでもっと困る、女を得る機会が少なければ粗末にできないなどの差し迫った状況のためである。つまりその場合もジェンダーが等価値であったというより、貧困ゆえの「女性資源」の希少性のためといえる。

歴史をどのように読むかはあまりにも恣意的でもありえる。実は彼のジェンダー論は近代産業社会批判の武器なのだが、過去を美化する作用という諸刃の剣でもあるのだ。興味深いこととどうか、当時埼玉大学の教員で、1984年文芸春秋に「男女雇用平等法は文化の生態系を破壊する」と言う論文を発表して、フェミニストの中では否定的な意味で有名になっていた長谷川三千子氏は、イリッチと意気投合する。⁵⁴

「イリッチさんのおっしゃったことは、私が考えていたこととあまりにもぴったりと一致しているので、驚きのあまり、どうお話をしているのかわからないほどです」

彼女はジェンダーの喪失を、個人化が進む中で社会のコンテクストからの引きはがし、と憂え、個人主義を徹底するフェミニズムを批判する。その彼女がどのような思想的傾向で彼に共感するかは、その後の彼女の発言からも明らかである。

「イリッチさんはどうすれば社会が絆を持った有機体として機能できるかを模索している。それが私の天皇陛下への思いとつながります」⁵⁵

前近代社会への夢想家、「プレ・モダン」同士の共感と言えば不思議はな

いかかもしれない。

このシンポジウムの中で、当時エコフェミニズムの旗手と言われた青木やよひ氏が、この二人に強い違和感を示している。

長谷川さんが使っておられるコンテキストの概念も、イリイチさんのテキストの説明も、どうも私にはぴったりこないの、それをジェンダーとどう関係付けてよいのか、ここで簡単には言えません。だいたい私のジェンダー概念は、イリイチさんに影響を受けたわけではなく、まったくちがうものなんです。……いわゆる「伝統的な」コンテキストによる差別意識と、産業社会では「産む性」たる女は劣った労働者だという、近代的なコンテキストにおける効率性から来る差別です。⁵⁶

長谷川氏と対極の立場、天皇制を批判し15年戦争への女性の加害性を初期から指摘してきた加納実紀代氏は、「社縁社会から総撤退を！」という刺激的なタイトルの論文の中で、イリッチとエコフェミの理論を敷衍したのち、資本に良いように使われるのは結局アジアへの搾取と抑圧に加担すること、みんなで降りようと呼びかけた。⁵⁷

加納氏の提起は、性差別を利用する資本主義に奉仕しないオルタナティブへの提起であった。自身のパート経験から、露骨な性差別のシステムへの組み込まれての困難な闘いは、そして女性でもパートでも認められようと頑張ることは、15年戦争のとき女たちも侵略を支えた銃後と同様、日本のアジアへの経済侵略を支えることにしかならない、と体験的に結論付けた。そして矛盾の構造に組み込まれ苦悩するより賃労働の外部に別の原理のシステムを作ることにエネルギーを使おう、そしてまた女性差別を組み込んでしか成り立たないシステムから撤退することで、資本主義に打撃を与えよう、という積極的な呼びかけをしたのだった。今から思えば、女性たちがインフォーマル・セクターに動員されさらに都合よくシステムを支えることへの抵抗の提起で、江原氏の提起する“内部を異化するオルタナティブ”の一つでもあったのだが、皮肉なことに、というか、加納氏とはまったく逆の立場にある天皇主義者の長谷川三千子氏と、対極の場からイリッチから近代批判を読み取ろうとした同様の行為のために、加納氏の言

説は、彼の反フェミニズム性ととともに、一斉にフェミニストから反発されることになったのである。⁵⁸

こうしてイリッチはフェミニストたちに批判されたが、それでもなぜ彼がそこまで集中砲火を浴びなければならなかったのか、を考えるときに、80年代がどういう時代であり、彼の言説が、フェミニストでない人々に見えない形でどう受容され得たか（これは本人も望んでいない形で、だったのかもしれないのだが、彼の理論の欠陥にも起因する）、それに対してフェミニストがどれだけ危機感を抱いたか、ということの認識がないと、なかなか理解が難しい。そしてまた、今現在考えると、その危機感は想像できるとしても、いささか、理性を欠き欠落する部分もあったようにも思われる。それは先にあげた青木やよひ氏が、日本の家父長制的な資本主義の構造を踏まえて、むしろイリッチに批判的だったのに、イリッチに対するフェミニストの批判が彼女にも向けられ一緒にエコフェミニズムとして「排斥」されてしまったことや、加納氏はそれを乗り越えた生き方を提起しようとして、真意が汲み取られなかったという結果に見られるのではないかと思う。

なぜイリッチはフェミニズムにとって危険だったのか

80年代は、70年代のオイルショックから継続して他の多くの先進国で、戦後初といってもいい不況と雇用不安に襲われたが、70年代をOA化による合理化と主婦労働のパート化で乗り切った日本経済は、紆余曲折があるもほぼ順調だったといえる。そして80年代の後期になると、いわゆるバブルという未曾有の好景気が訪れる。

80年代の日本は80年代のヨーロッパとは異なった状況にあった。ジャパン・アズ・ナンバーワンの輸出超過の80年代前半と、バブルに向かう後半に、日本はわが世の春に踊り、雇用不安はなく、仕事は苛烈さを増した。そしてますます金銭を基準にした生活に日投げ込まれた。

1985年、多くの女性団体が反対した均等法の狙いは明快だった。男性規

範への少数女性の取り込みと、能力主義による多くの女性たちの落ちこぼしだった。しかし、すでに「相互補完的なジェンダー」の前提基盤が構造的に喪失している近代社会に住む女性たちにとって、その狙いを逆手にとって、男性規範の「チン労働」への参加を女性規範に組み替える契機とすることもできたはずだった。

家父長的で植民地を必要とする男性賃金ではなく、女性を家計補助的に都合よくつかう「主婦」賃金でもなく、生命の再生産能力をもつ女性を基準にした賃金と働き方を。ミスターでもミセスでもないミズを。実際女性団体は男並みではなく女並みの平等をスローガンにした。そして男女とも家庭責任を、男性の非人間的な働き方を基準にしないようにも求めた。しかし、そうした方向性をもイリッチは次のように指摘する。

近ごろの中産階級の父親たちは、台所仕事や子どもの世話を自分でやってみたいとますます主張するようになっていく。客に『ステーキをつくって』あげたい、幼い息子と一時間ほど遊んでやりたいという。だが、＜家事労働＞の若干を引き受けるといふふうに見せて、この人たちは両性間に競争と恨み・憤りという新たな場を切りひらくことになる。以前は、女性は賃労働での機会均等を求めて競争に駆り立てられた。いまや男性は、家庭のシャドウ・ワークのなかで特別のしんしゃくを要求しはじめている。過去 20 年間、女性が機会均等を求めて法的保護を勝ち得てくるにつれて、職場での差別はますます広がり、ますます鋭敏に感じられるようになってきた。いまや、雇用がますます稀少となるにつれ、男性たちはシャドウ・ワークのなかに入ることを余儀なくされてきたが、それとともに、女性差別はまさしく彼女の家庭において、ますます公然となっていくであろう。⁵⁹

なぜ、女性と男性の領域が混ざることが、女性の地位低下を招き、女性差別を強くすることになるのか。なぜイリッチはこうした男女の相互乗り入れに、否定的なのか。男と女が別々の仕事をしていた時代を美化することは、従来の私領域のカテゴリーに女性をとどめ、新しい価値観をまぶすことで「女性たちの不満」を解決する願ってもない理論として、もっと卑近に言えば実際男性にとって、男は男の仕事があるので育児なんかしなく

ていい、という理論として大いに歓迎されてしまうだろう。

その状況の中で、女には女の仕事、という言説は、家事負担を彼女たちに固定化し、彼女たちの苦難をますます厳しくする。男性との相互乗り入れの可能性さえ摘まれてしまえば、過酷な仕事と家事の二重労働のもと、多くの女性たちは、男のように働くのはばかばかしい、女性には女性の仕事が向いている、という方向に導かれざるをえないのではないか。そもそも均等法制定側「資本主義的家父長制」は、不協和音を発する賃労働の中の「女性性」を排除し、より男性化することによって、女性を選別し包含しようとは図ったのだ。彼のこうした男女役割の相互乗り入れによる齟齬の激化への批判的態度は、そうした体制側、そして多くの男性側の立場に親和性があったのではないか。

イリッチのジェンダー補完性の言説は、リブ運動がめざした「内部を異化する」よりも、内部に入ることをむしろ回避して、「近代社会の外部としての存在を幻想として否定した」はずの幻想に依拠し居直り、近代社会を批判する主婦たちの理論へと、男性にとっては自らの基盤を脅かすことのない都合のいい理論に摩り替わっていくのも必然的だと思われる。

あらゆる場所で男性と闘うことは、むしろジェンダーの喪失を促進し、近代というセクシズムをより徹底する見当違いのものだと指弾される一方で、加熱し、膨張する経済活動のなかで男性のチン労働を問い直す運動はどのように遂行できるのだろうか。もちろん彼が語るのは、過去であって、「計画や理想とちがって、現に可能性のあるようなものではない。あるべきなにかではない」のであるというのであろうが。

実際 80 年代は、「女の時代」といわれても賃金格差は縮まらなかった。男性の正社員職場は、少数女性を男性化することでより男性化し、女性は男性社員の中の不協和音となるよりも、女性役割を担った上で現金生活の補填を支えるパートという選択を自然な流れのように行い、間接的な、より深刻な女性差別が拡大した。このなんとなく性別役割は望ましいのだ、という俗情と結託した意識は、きわめて具体的に、実践されていった。この時期、「女の時代」は「主婦の時代」に摩り替わっていった。

彼のメッセージは、今の社会で、ジェンダー役割や役割分業を継承して

いる主婦だからこそ、産業社会をラジカルに批判できるのだとされ、シャドウ・ワークからその本来使用価値のある労働を復権し、交換価値もある労働にしようとする運動に援用された。

イリッチの論では、主婦は歴史上未曾有の地位低下でしかない最も無価値なシャドウ・ワーカーなのだが、賃労働から降りるのは男性ではなく、女性たちだった。相互乗り入れをしないで、“棲み分け”するシャドウ・ワーカー主婦にとっては生命線である夫の賃労働領域は不可侵であり、彼らの領域を結果として支えた。

均等法ができて、「女の時代」公領域を選べる代わりに男性性を内面化することへの強制と「主婦の時代」そこから降りて主婦化を選ぶという、矛盾に満ちていてそれでいて符合性のある女性の分断状況はよりすすんだ。

「内部システムの一部として生きることも否定」するリブは、男性社会にあって違和感を提起し続ける存在としては大変やっかいなはずだ。均等法制定側「資本主義的家父長制」は、不協和音を発する賃労働の中の「女性性」を排除し、より男性化することによって、女性を選別し包含しようとは図ったのだ。生物的な性別でなく、企業社会を男性(性)に特化し、家庭や地域を女性(性)に特化したとも言える。

「この産業社会は“男”がシンボルであり、それに対するオルタナティブの場は“地域社会”、そのシンボルは“女”であるか（ママ）に見ることができよう。」

（横田克巳（生活クラブ元理事長）「オルタナティブ市民社会宣言」）⁶⁰

社会運動家のこの発言は、この時代の分業状況を的確に察知したといえるかもしれない。⁶¹

こうした男女の“棲み分け”は、結局どういうことを生んだだろうか。

主婦と言う存在がユニセックスのセクシズム経済を支える否定されるべき存在であると、フェミニスト以上にその労働の無価値性を強く主張したイリッチは、実際はジェンダー分業を美化することでそれを支える論理を与えた。これはまったく奇妙なことだが、実際彼の説の果たした役割は、男性との争いを抑えし避けるがゆえに、女性用のトラックへと彼女たちを

誘導し、結果としてインフォーマル・セクターを拡大し、それを推進したのだ。

フェミニストがイリッチを批判しなければならなかったのは、こうした彼の反動的な役割に危機感を持ったがゆえであった。女性の能力主義へのとりこまれと振り分けという困難な時代背景の中で、イリッチの言説がどのように受容される傾向にあったか、が、背景にあつてこそ、イリッチ批判だった。

80年代、日本の経済成長は世界の脅威となり、長時間労働時間など批判が集まり、この当時、週休二日制の導入も含めて労働時間は頭打ちとなる。しかしこの好況期に本当に、長時間労働が緩和されたかということ、実は週60時間以上の労働は増えているのである。一方週35時間以内の労働も増えている。つまり企業戦士化とパート化がいつそう進んだのが日本の80年代の労働実態だった。雇用機会均等法ができて男女の賃金格差は縮まらない。男性の賃金の6割強から格差縮小にむけての飛躍はなかった。そしてパートタイマーの賃金は男性の4割（年間収入で一時金を入れれば3割）のまま推移している。全雇用者に占める女性の正規労働者とパートの伸びは今に至るまで、パートが2倍のまま推移しているのだ。近年新しく就職した女性労働者のうちパートである率はとうとう正規労働者を超えたのである。また深刻なのは高校の新卒者である。2002年では驚くことに高卒女子の38.6%はパートであり、高卒男子でも28.3%なのである。3割から4割が正規社員として雇われていない。

M字型雇用（出産時に退職して子どもが大きくなってから再就職）の再雇用として、女性型トラックを走るための、正規雇用からの逸脱としてのパートではなく、労働人生の最初からのパートタイマーなのだ。

まさに主婦化の拡大としか言いようのない事態である。大卒は男女ともにパートの比率は70年代から変わらない。95年の日経連の新経営戦略で言われていたことを警告する向きもあったが、ここまで終身雇用や年功序列がかくも簡単に瓦解し、分化するとは多分予想されていなかったであろう。

そして現在男性の正社員労働はどんどん流動化、高卒新卒男子にまでそ

の低労働条件のパート雇用が進み、450万人といわれるパート型労働者フリーターは高齢化してもますます自立できる労働条件は得られず、中高年はリストラで自殺、残った正社員労働はリストラの中でますます労働強化、過労でノイローゼで自殺、という陰惨な社会になりつつある。忸怩たる思いだが、こうした事態はなぜ避けられなかったのだろうか。

90年代フェミニズムは、女性たちに何ができたか

日本においてこの主婦化—つまりいったん女性を私領域に押し込めた上で、正規労働者とは違う形でその労働力を引き出して、「正当な労働力の交換」をしないですむ労働力の交換システムをつくること—が急速に社会に浸透して、それが主婦以外の人々にまで拡大しているのは、ここ数年目を見張るばかりである。ミースの指摘を証明するような、あるいはイリッチも実は指摘していた事態になっている。それは80年すでに準備されていた。こうした80年代の状況をイリッチのせいにしてしまうのは彼の影響力への買いかぶりかもしれない。また、もし、ミースが紹介されていたとしても、こうした大きな流れを止められる動きになったかは怪しいかもしれない。

しかし、イリッチのいう、「二重に盲目」のフェミニストである私は、この10年間、パート化へと雪崩を打つ中で、本当に孤独な闘いを強いられたと実感している。公領域と私領域での苛烈な男性との闘いに殉じて、しかしながらチン労働を女性化すること（有給の育児時間短縮）や、家事闘争での一定の成果を得ながら、マクロ的に見るとそれはまったく何の意味もなかったと思えて、むなしい気持ちを抑えられない。

「北」（日本）の女性たちは実際平等賃金と平等な地位をたいして追求してこなかった。男性の働き方が変わらない中で、男性との平等はあまりに過酷なことだったからだ。追求したところで、それを得ることもほとんどなかった。差別の実態に対してきわめて数少ない裁判をした果敢な女性が、10数年間の賃金差別を実証して約4000万円を得たが、それでも30年以上の勤続年数を考えれば到底少なすぎる額である。2000年になっても同じ正社員の身分でありながらの男女格差である。ましてや非正規雇用の女性た

ちはそんな裁判すらなりたない。組合もない。

二重の労働を強いられる共働き女性たちは、いくら育児休業を入れたところで、経済戦争の中苛烈になる男性規範から落ちこぼれざるを得なくなる。そしてそこから落ちた女性たちは、決して自立できない労働条件の中で、夫の過酷な労働を支える。それが近年みるみるうちに若年化しいくら働いても自活できないほどの低賃金に追いこまれた初期資本主義の労働者のような無権利状態の中で使い捨てられているフリーターとして「主婦化」は驚くほどの速度で拡大している。「北」でも生存を危うくするような第三世界的状況が逆流し拡大しつつある。

この進行していた状況をフェミニズムは捉える必要があったのにもかかわらず、「女の時代」と「主婦の時代」が乖離したまま、結果的に「主婦の時代」が凌駕した80年代において、新国際分業の中のアジアの女性たちやパート労働女性たちと、中産階級の主婦たちの運動をつなげていくことを提起する準備をする思想的土壌が私たちにはなかったという気がしてならない。

もちろんこうしたアジアの女性労働者と連帯する運動はあった。CAW(アジア女性労働センター)の活動なども国内のパート運動と、アジアの女性運動をつなげようという試みをしてきた⁶²。アジアの日本の女性労働者の問題とずっと追求してきた労働運動家の塩沢美代子さんは、日本での労基法改悪が通ってしまったとき、アジアを回って、女性労働者たちに謝罪をして回ったという。日本の状況とアジアとは密接に関係して相互に連動していたことを自覚しながら活動した運動ももちろん存在したのである。

また故松井やよりさんが、大新聞の記者としての特権を最大限活用して、男性職場の中で女性視点、南の視点をいれながら「初の定年まで勤めた女性記者」を続けた傍ら活動してきた「アジア女たちの会」や、定年後の「アジア女性資料センター」そして「女性戦犯法廷」などの活動も、貴重なフェミニズムの活動としてあったと思う。

また、労働力の女性化を紹介した竹中恵美子氏や久場嬉子氏たちの意欲的な仕事も地道に行われてはいた。

しかし、私が、90年代にミースに出会ったとき感じた「主婦化」という

用語への違和感は、80年代私たちは、ミースの言う中産階層フェミニズムを大きく育てることができなかった結果ではないかと思えてならない。多くの私領域の女性の占有を当然化し、家父長制の中での自由を謳歌していた主婦たちにとってアジアの女性問題は「かわいそうな人たち」のこと、あるいは社会的な不正義への異議申し立てであって自分の抑圧の問題では全くなかった。(それはいまだにそうである。経済的に自立しようと思っははいない主婦にしかできない無償労働によって、「途上国の女性の自立ために」と古着を売っている運動団体などはその最たるものではないかと思う。彼女たちの善意を私は疑わないが)

90年代初め生活クラブ生活協同組合で共催する川崎で行われた TOES (サミットに対して行われる世界の草の根の国際会議) で、慰安婦問題とアジア労働の問題と女性ユニオンの活動を結び付けた問題を彼女たちに提起しようと、CAW や女のユニオンの活動家をパネラーに分科会を持ったこともあったが、せめてそのくらいしか私にはできなかった。主婦たちの運動と、労働現場の女性の運動の乖離は、埋められなかった。埋められる理論がなかった。

イリッチと一緒にエコフェミを一掃したフェミニズムは実際90年代何が果たせたのかを検証すべきではないかと思う。江原氏が示した理論の水準にもかかわらず、実際の実践はほとんど進まなかった。⁶³エコロジーと切り離した形のフェミニズム運動は、分離主義的傾向を強めた。ラマーズ法と自然食が嫌いな小倉千加子氏は、まさに主婦批判で人気を集めたのだが、結局主婦たちのガス抜きにしかならず、2000年代になるまで本人も引きこもってしまった。長時間労働を改善し、家庭責任を男女ともにとという運動も、出現を許された高学歴高収入の若い女性たちの一部以外 80年代 90年代を通してほとんど進まず、女性の半分は加納氏の危惧するパート労働者になってしまった。こうした時代の進行の中、生理もとまるくらい働いて競争しつづける女性戦士か、夫がいて暮らしていけるパートしかない主婦の時代に、現実的なその状態から脱出のオプションはなんらなく、男性や結婚への幻想を痛快に罵倒するフェミニズムは現実を忘れるための娯楽としての消費しか、使えなかったのだから。

当時のイリッチ批判で結束したフェミニズムも青木やよひ氏や、加納実紀代氏の重要な指摘を膨らませることができなかった。そのあと、江原・上野は上部構造下部構造論争に入るのだが、ミースの、それらをふまえた上でそれを乗り越える思想が紹介されなかったことは、やはり運動にとって大きな損失だったと思われる。ミースが分断を乗り越えて思索を深めてきた思想は、ばらばらにねじれてしか、日本に紹介されないでいる。それが今回のフェミニズムを外在化したサブシステムの提示のような「混迷」を生んだものと残念でならない。

サブシステム・パースペクティブとは

しかし、それでもいつでも遅すぎるということはない。こうして不十分でもミースの提起を紹介することも意味のあることだと信じたい。

ミースが私に言った言葉のように、サブシステムとは学ぶものではなく実践であるからだ。私達はよりよい世界のためにどう運動を作っていくのかを明らかにしなければならない。観念化や理想化のために、無辜の人びとを利用してはならないのである。

開発モデルから脱却する私たちの試みは、この資本主義家父長制の世界システムの中で今日気づいた人が今から行える行動なのである。この日本の中でそれで闘うことは世界の姉妹たちと連帯することだとためらうことなくすすめていきたい。

サブシステムとは、「南」の代弁者になることではない。私は 80 年代のリブの到達点を文字通り生きることだと思っている。

『オルタナティブはある』(TIAA) は、ミースが 70 歳になったお祝いにみんなが世界中のオルタナティブを集めた本⁶⁴である。ケニアの女性たちが暴落したコーヒーを引っこ抜いて自分たちの食べる物を植えた話などの実践がたくさん載っている。

これは私たちもケニアに行って女性たちを支援しようということではない。過酷な植民地支配によって貧困や男尊女卑が激しいアフリカ（これも単純な伝統ではなく近代化と複合していよう）でもできるなら日本でもで

きるということだ。何処でも、誰でもできることを、自分のところで何ができるか、を考えることが必要なのだ。そして各地で「オルタナティブはある」といえる実践を作っていけると思う。

前述した加納実紀代氏が、唱えた企業に雇われないオルタナティブは、当時多くの女性たちから非難されたが、実際 20 年を経たワーカーズ・コレクティブは、地域に女性の職場を作りつつあり、また不況の中で男性の雇用としても広がりつつある。(ただし、非正規化と考えると、アンビバレントな評価にもなるが。)

25 年銀行パートを勤め続けている名古屋のパート労働活動家の坂喜代子氏も、地域の女性たちに、起業講座を開く。彼女は実は自給している農民で、無農薬の米や、野菜、卵などあらゆるものを農地で作り、漬物やケーキなどの加工品も作っている。同時に地域のユニオンの長年委員長を務め、さまざまな職場での差別やセクシャルハラスメントを団体交渉で解決してきた。彼女のパート賃金は驚くことに 25 年経っても時給 870 円で、年収 100 万にも満たない。しかも仕事は ATM の管理など部長がしていた責任の重い仕事を担当している。彼女の存在自身が日本の企業がいかに女性を安く使うことで成り立つかをあらわしている。彼女が 20 年前に雇った職業病の補償時給換算は物価スライド制で 1300 円になっているのに、働き続けている方が安い時給とは驚くべきことである。彼女と同年の男性は年収 1000 万円以上である。彼女はこんな銀行でどれほどひどい目にあっても四半世紀パートを続け、やめない。職場の銀行で、正規社員中心の労働組合にめげながらも、リストラされそうな正社員を助けたり、セクハラをやめさせたり、いじめをなくしたり、たった一人でも闘っている。彼女は企業社会に関わりながら企業社会の輪から独立しているからこそラジカルに闘えるのだ。彼女の目を通すと日本の銀行の奇怪な姿や、醜悪な男性中心主義が見えてくる。現代の産業社会の内部にいながらにして、内部システムの一部として生きることを拒否している数少ない例といえる。

また、大阪では「いこる」という働く女性の権利センターが、パート運動や女性労働運動、住民運動、母子家庭運動などを地域でやってきた人に

よって 2004 年設立された。ここでは各地で困難な状況の中で生きようとしている女性たちの息吹を聞くことができる。

私はこういう女性たちを励まし、また世界のほかの場所にいる女性たちとつなげていけるサブシステムでありたいとずっと思ってきたし、これからもそうであると思う。

ミースはフェミニストの労働観を以下に要約するように述べている。

1. 労働とは苦役ではなく、直接的な声明の生産や使用価値の生産につながっていることである。
2. 労働と余暇を分離した機械的な時間短縮ではなく、相互作用的な労働
3. 労働を無機的なものにせず、有機的で官能的で感情あるものとする。
4. 労働する人びとに有益な労働であること。
5. 生産と消費を分離させないこと

今もし幸運なことに、このご時世に仕事を持っていたら、できることはたくさんあるはずだ。今している仕事が環境破壊的な仕事ならそれを少しでも変えることだ。長時間が常識の仕事を一人で 5 時で帰るのも立派なサブシステム運動である。5 時に帰れば、子どもの食事作りも、NGO の事務局での発送手伝いもできるだろう。

旅行社に勤めているなら買春観光をやめさせられる。巨大プロジェクトに関わっているなら、無用な国際投資はやめるよう提案できる。公務員でも、大企業でも、いろいろなサブシステムな提案ができる。平和学を大学で教える教員になるだけがサブシステムではないはずだ。私たちの社会の成り立ちを知って排除されている人たちの存在を考えながら、ほんの少し勇気を出せばいいことだ。職場がますます開発と市場の暴力によって荒れているのはわかっている。今まで考えられないような暴力事件や悪質なハラスメントも急増している。だからこそ。ここから少しずつ変えていくしかない。

私は逆にこのグローバル化の中で、NPO や NGO がサブシステムとせ

んぜん直結しない可能性について危惧する。行革や、失業対策に活用され、労働条件の引き下げになり得る。そういう意味ではサブシステム（生存維持ぎりぎり）がシステムを支えるという恐れは、NPOにこそ危うくある。新しい公共事業の隙間産業として、補助金で操作され、その中で酷使され安い賃金で疲れ果てるより、私は、むしろ企業の中でサブシステム志向で闘うことが大切かもしれないと思う。企業の中でサービス残業をやめさせ、収益悪くても女性の賃金を上げ、あるいは男性の賃金を下げ、資本の蓄積を妨害し、つまらない消費をしないで、第三世界の人に連帯する方向性が日本の労働運動の中で特に収益の高かった80年代にほとんどとられなかったのは、残念なことだ。フェミニズムよりさらに批判されるべきなのだが、批判の対象にさえならなかったといえるかもしれない。実際労働運動の80年代の遺産は自分もかかわりながら情けないが、ほとんどないのである。優秀で志の高いNPOやNGOのスタッフなどになれない普通の勤労者も、仕事をしながら仕事のなかで少しでもサブシステムの方向にしていける道を日本のなかにつくるというシンプルな企てが、仲間作りに失敗し、まったく成功しなかったことが悔やまれてならないのだ。内部告発もままならない不祥事まみれの醜悪な企業社会を作って生きた責任は私たち一人一人にある。

サブシステムとはあるべきモデルを作って崇拝してまねることではない。先進国女性、を崇拝の対象にすることをやめても、第三世界女性、先住民女性など別のモデルを持ち出したならそれは同じことかもしれない。モデルではなく、お互い尊重しあい、刺激しあい、あるべき方向性を探す共同作業こそがサブシステムへのパースペクティブなのではないだろうか。サブシステムは実現すべきモデルではなく、方向性なのだ。第三世界に行かなくても、農村に行かなくても、いま・ここで実践できることだ。たくさんの実践例を作り出したいものである。

はっきりしているのは、今の自分の場所で正義を通すことに関心がないものが、遠くの不正を糾弾するのは欺瞞だということである。正しいフェミニズムの理解の上で、サブシステムを構築してさまざまな運動をと共闘していく回路を作ることが、私たちに問われている。私たちが目指すの

はこうした視点でサブシステムを自分の場所で実践していくことではないかと思う。いわゆる「北」の中産階級の女性たちのつらい現実を励ますフェミニズムを私は切って捨てたくはない。「女」という痛みの共有者であることで、あらゆる分断を乗り越えられると謙虚に信じたい。

中産階層女性はもっと貧しい姉妹のところに行き、彼女たちからこうした状況の下で生き残る方法を教えてもらう方が良いだろう、尊厳を持って生き残る方法も。⁶⁵

浅薄な表面をなぞることを戒めながら、私達は、フェミニストの批判的視点を持って、南北の女性たちがお互いを尊重し、立場を超え励ましあえ別の世界をもとめていける希望を見出していく関係性を追求したいと思う。

フェミニストは自然や他民族の搾取がなくなる限り女性の解放もないことを何度も何度も主張しなければならない。他方で、フェミニストは女性が解放されなければ、そして自然の破壊がやまなければ、真の民族解放はないことを、あるいは性別分業と国際分業が変革されなければ、真のエコロジカルな社会は実現しないことを主張しなければならない。⁶⁶

1 戸崎純・横山正樹編(2002年)、郭洋春・戸崎純・横山正樹編(2004年)。

2 季刊『ピープルズ・プラン』17号(2001冬)。

3 郭洋春・戸崎純・横山正樹編(2004年)48頁。

4 郭洋春・戸崎純・横山正樹編(2004年)55頁。

5 ミース、M(1997年)55頁。

6 ミース、M(1997年)57頁。

7 私事を言えば、私も70年代後半からその運動の端に関わり、こうした流れの中で自分があったという実感がある。80年代初めにヨーロッパで反核運動、その後フェミニズムの思想展開とともに「女という現場」として、環境問題を主題とする事業を主婦中心に活動する生活クラブ生協で、「異端としての子持ち女性正規労働者」としての経験は、この流れとともにあったと思う。特に、アジアとの連帯運動、南北の従属関係の克服と環境運動と、自分の生活の中での切実な問題と運動課題としてのフェミニズムとが統合されていくことの爽快感こそが私のサブシステムへの傾きになっており、今回の違和感になっていると思われる。

-
- 8 江原由美子(1985年)156頁「ウーマンリブとは何だったのか 誤ったリブ運動観」。
- 9 ミース、M(1997年)。
- 10 ミース、M(1997年)。
- 11 ルクセンブルク、ローザ(1934年)。
- 12 ミース、M(1997年)50頁。
- 13 ミース、M(1997年)71頁。
- 14 ミース、M(1997年)72頁。
- 15 ミース、M(1997年)131頁。
- 16 ミース、M(1997年)292頁。
- 17 このミースの指摘は、フェアトレードに対しても成り立つかもしれない。
- 18 80年代にかかれたものなので、社会主義国ではなく資本主義工業国という意味。
- 19 ミース、M(1997年)314頁。
- 20 ミース、M(1997年)314頁。
- 21 ミース、M(1997年)315頁。
- 22 ミース、M(1997年)315頁。
- 23 朝日新聞社編(1986年)122頁。朝日新聞社が1985年10月23日から25日に開催したシンポジウム「女は世界をどう変えるか」イリッチ、上野千鶴子、西川潤などを含むディスカッションの中での発言。
- 24 ミースが来日の際に色とりどりの衣装をつけた女性たちの集うきれいなポスターを持ってきてくれた。
- 25 ミース、M(1997年)316頁。
- 26 「北」の最たる国であるアメリカ合衆国での賃金格差は壮絶である。ウォールマートの経営者家族合わせて1025億ドルの年収だという。一方ウォールマートの労働者は、1時間7ドルで働いているのでフルタイムで働いても貧困ライン以下年収18000ドルだという。各地で裁判が起こり、女性の差別を裁判所が認め、160万人の女性がその対象になっている。
- 27 ミース、M(1997年)286頁より (Mai Thi Tu and Le Thi Nham Yuyet 1978)
- 28 ミース、M(1997年)355頁
- 29 92年の来日の際、私は生活クラブを理想化してほしくない、そこで働くフェミニストの目からその女性差別的な側面を綴った手紙を渡したのが縁で、なんどかやりとりをすることになった。
- 30 ここでとりあげるのはイリッチの次の著作2冊の本のみである。他のイシューはここでは取り上げない。イリッチ (1982年)『シャドウ・ワーク』、イリッチ (1984年)『ジェンダー』岩波書店。
- 31 イリッチ(1982年)223頁。
- 32 イリッチ(1984年)141頁。
- 33 イリッチ(1984年)11頁。
- 34 イリッチ(1984年)9頁。
- 35 イリッチ(1982年)218頁。
- 36 イリッチ(1982年)218頁。

-
- 37 イリイチ(1984年)107頁。
- 38 イリイチ(1982年)「21 家父長制とセクシズム」 68 頁下段。
- 39 イリイチ(1982年)29頁。
- 40 上野千鶴子 (1886年)『女は世界を救えるか』 119 頁。
- 41 江原由美子 (1985年)『女性解放という思想』勁草書房、上野千鶴子 (1986年)『女は世界を救えるか』勁草書房、萩原弘子 (1988年)『解放への迷路—イヴァン・イリッチとはなにものか』インパクト出版会の3冊。
- 42 ミース、マリア (1997年) 63 頁注 8。
- 43 イリイチ (1984年) 103 頁。
- 44 イリイチ (1982年) 212 頁。
- 45 萩原弘子(1988年)19頁。
- 私も萩原氏同様嘲笑的な下劣さに怒りを感じるが、「ペニス」羨望 (エンビー) という、ラジカルフェミニストが言及したフロイトの男性中心主義的観念は心理学的なものではなく、むしろ経済的な構造として仕組まれた「ペイ」羨望であるという彼の指摘 (パロディ) は、私は実はなかなか秀逸だとも思う。
- 46 江原由美子 (1985年) 173 頁。
- 47 江原由美子 (1985年) 54 頁。
- 48 江原由美子 (1985年) 56 頁。
- 49 朝日新聞社編 (1986年) 89 頁。
- 50 新評論編集部編 (1986年) 175 頁上段青木やよひ発言。
- 51 イリイチ (1984年) では、再生産と言う項目を置きながら何も語っていない。
- 52 萩原弘子 (1988年) 75 頁において萩原氏は「なぜ社会は、男を上位におき、女にハンディキャップを課するのか。私はその理由を本書で説明しようとしなかった。『ジェンダー』 178 頁を引き、彼にはできないからだ、と喝破した。
- 53 上野千鶴子(1986年)。
- 54 新評論編集部編(1986年) 168 頁。元になったシンポジウムは、先の朝日新聞社のシンポジウムの前 1985 年 10 月 14 日に行なわれた。長谷川氏は、『ジェンダー・文字・身体—イリイチ・ドゥーデンを囲んで』の中で、足立真理子氏や鶴見和子氏と一緒に旧かなづかいで参加している。
- 55 「天皇陛下ご在位 60 年奉祝国民の集い」での発言 1986 年 4 月 23 日『京都新聞』
- 56 新評論編集部編(1986年)174 頁上段
また、イリッチは綿貫礼子氏に質問され、女性原理はない、とここで明言している。
- 57 「社縁社会から総撤退を！」『新地平』 1985 年 11 月号。大橋由香子、小倉利丸編著 (1991年) 所収 この本の中に反響が収録されている。
- 58 上野千鶴子氏はこの当時は、『家父長制と資本制』の本の中で加納氏の発言を家庭回帰の言説と言及している。また加納氏の具体的な提案自身 (ワーカーズ・コレクティブ) が、別の形のインフォーマル・セクターに過ぎないのではないかと言う危惧にも正当性があった。この件については拙稿修士論文「生活クラブ生協運動の実践と展望—ワーカーズ・コレクティブの 20 年後の検証」を参照されたい。
- 59 イリイチ (1984年) 105 頁

60 横田克己 (1989年) 53頁

61 実際この時期生活クラブ生協はパートのかわりにワーカーズ・コレクティブを作っていくことになる。これもまたインフォーマルワークの拡大とも言える。しかしまたインフォーマルな働き方が拡大する現在においてはその中のオルタナティブとして異彩を放っているという皮肉な現象にもなっている。

62 日本のパート問題について現場の運動が英訳されてパンフを発行したりという活動をしていた。私の小文も英文ニュースレターに翻訳されたことがある。

63 私の子持ち女性労働者として賃労働の中で、性差をハンディに転落させる働き方の規範を変える闘いとしてあった15年間も、それを進めようとした実践だったと思えるのだが、同様の実践に残念ながら出会うことがなかった。

64 Verhof, C・V他 (2001年)

65 ミース、M(1997年) 316頁

66 ミース、M(1997年) 337頁

参考文献

朝日新聞社編 (1986年) 『国際シンポジウム—女は社会をどう変えるか』 朝日新聞社
イリイチ、I (1982年) 玉野井芳郎・栗原彬訳 『シャドーワーク 生活のあり方を問う』
岩波書店

イリイチ、I (1984年) 玉野井芳郎訳 『ジェンダー 女と男の世界』、岩波書店

イリイチ・フォーラム編 (1981年) 『イリイチ日本で語る 人類の希望』 新評論

上野千鶴子 (1986年) 『女は世界を救えるか』 勁草書房

Verhof, C・V・and others (2001年) 『There is an alternative』 Z books

江原由美子 (1985年) 『女性解放という思想』 勁草書房

大橋由香子、小倉利丸編著 (1991年) 『働く/働かないソフェミニズム』 青弓社

郭洋春・戸崎純・横山正樹編 (2004年) 『環境を平和学する！2—「脱開発」へのサブシ
ステンス論』 法律文化社

戸崎純・横山正樹編 (2002年) 『環境を平和学する！—「持続可能な開発」からサブシ
ステンスへ』 法律文化社

萩原弘子 (1988年) 『解放の迷路—イヴァン・イリッチとはなにものか』 インパクト出版
会

藤岡美恵子 (2004年) 「複合差別—先住民女性の視点から見た構造的暴力」 『アジア太平
洋におけるジェンダーと平和学—アジア女性の社会的地位 3』

ミース、M (1997年) 奥田暁子訳 『国際分業と女性』 日本経済評論社 (原著 1986年)

ミース、M C・v・ヴェールホフ、V・ベンホルト=トムゼン (1995年) 『世界シス
テムと女性』 古田睦美・善本裕子訳 藤原書店

Mies, Maria (1999年) 『Subsistence Perspective』 Z books

三輪妙子編 (1989年) 『わいわいがやがや「女たちの反原発」』 労働教育センター所収

横田克己 (1989年) 『オルタナティブ市民社会宣言』 現代の理論社

ルクセンブルク、ローザ（1934年）長谷部文雄訳『資本蓄積論—帝国主義の経済的説明
への一寄与 下巻』岩波文庫（原著発行年1919年）